

○ 第二回

椿説月讀

却説岡部鏡前守長密ぬしに、一年の三月中浣玉子の稻荷に參詣のつひで日暮里飛鳥山の社をも見ばやと從者一人一人隨へりと忍びたる粧束して立出たまひ稻荷の社に武運長久を祈りて歩と廻らし海老屋といへる會席料理屋に登りて暫時杯を取り微醉機嫌にてそこを立出たまひ折しも年齢五十あまり三つ四つと覺しう町人休の老人向ひの方より來かゝりしが行遊ひさま物に頹きて大地に破當と轉倒びしが昨夜の雨の名残り行潦の中に陥入りければ泥水跳飛て圖らず長惹ぬしの袴の裾と汚しぬ從者此と



見るより赫と怒り矢庭に老人の襟首取て其場に引据ゑ疎相と申しながら嚴の御袴を汚したる無禮者老人なりとて用捨れ成らじと言も荒く罵しりて破當と睨みしるの面相切も仕兼ぬ氣色なれば老人ハ恐怖れ只免玄縞へと計り首も得上げず大池に平伏しむたりけり少し遅れて來りたる年齢十五六にて容貌妖艶しき一人の娘此老人の子なるにや此と見るより吐嗟と計り怖は忘れて走寄り從者と老人の間に身を抛ち両手と支へて物語しき父が此く思ひざる無禮を仕出し侍りしも全く老母の力なく殊に些少